

『鬼三太残齡記』と会津街道

—『清悦物語』と比較して—

三田 加奈

はじめに

『鬼三太残齡記』は、雑色鬼三太が高館合戦以後も長生して義経主従について語る物語である。主人公の鬼三太は「清悦或ハ氣散ヲ、自ツカラ號トス」とあって、清悦とも名乗ったという。この部分からも『清悦物語』との関連が伺える。『清悦物語』は『鬼三太残齡記』に先行して、近世期に東北地方を中心にして広がった物語である。その話題は、清悦の長寿、高館合戦、仙北次郎の物語の三つから構成されている。ただ、写本によっては仙北次郎が欠落するものもあり、異本の多い物語といえる。

柳田國男は『鬼三太残齡記』を、この『清悦物語』の一異本と位置付けている。^①しかし、『鬼三太残齡記』は、義経北国落ちの独自のルート設定や、高館合戦における義経の死には直接触れないなど、『清悦物語』と大きく異なる部分がある。果たして『清悦物語』と同系統の物語なのだろうか。本稿では『鬼三太残

齡記』と『清悦物語』との内容の比較を通して、その差異を明確にしながら、そのうち「北国落」の道行に注目する。道行のルートの一つ「会津街道」（越後街道）を取り上げ、背景となる在地の歴史的事情や物語の意図について考察し、『鬼三太残齡記』の独自性を明らかにしていきたい。

一 『鬼三太残齡記』の先行研究と諸本

『鬼三太残齡記』そのものを本格的に取り上げた先行研究はないが、それに準じた柳田國男の「東北文学の研究」に含まれる「清悦物語まで」（『雪国の春』所収）^②の中で、「鬼三太残齡記」について取り上げる。その一部を紹介する。

談話の骨子というべき部分が、ほかの『清悦物語』とは異なっている。最も顕著なる例を列挙すれば、第一には『鬼三太記』の方では、義経が死んでいない。他の一方では首

になつて鎌倉に送られ、含み状によつて、頼朝の誤解は釈け、讒言をした梶原が刑罰に処せられているに反して、これでは中尊寺の三位房法印とかに諫められ、弁慶ばかりを見殺しにして山越しに落ちたと書いてある。……

要するに始めから終わりまで、かりにも史書の罅を補うというがごとき態度ではなかつたので、もしこんな話が後代に及んで珍重されたとするならば、それはもう『義経記』も耳に蛸で、何か新しくかつ笑うようなものを求めていた人心に投じたもの、いわば三馬の『忠臣蔵偏痴奇論』などと同じく、いわゆるオカシ文学の不完全なる発育に過ぎなかつたと見てよいのである。

柳田は、『鬼三太残齡記』を『清悦物語』の一異本ととらえ、話の骨子と呼ぶべき大事な部分に異同がみられると指摘する。その異同は、読者が新しさや笑いを求めた結果であり、それが「オカシ文学の不完全なる発育に過ぎなかつた」と手厳しく、作品に対する評価は低い。

柳田國男が東北大学の職員に転写させた写本を、成城大学民俗学研究所が『諸国叢書』(第一一輯、一九九四年)に載せている。その解説「解題『鬼三太残齡記』と柳田國男」を田中宣一が書いている。田中も『鬼三太残齡記』を「オカシ文学」と見なしてはいるが、柳田ほど作品を過小評価していない。むしろ、この作品によつて柳田の「東北文学の研究」の成果が確立され

たと、別の視点からその価値を認めている。

奇怪なる翁の語る衣川合戦の真相なるものこそ、『鬼三太残齡記』を『義経記』巻八の異伝たらしめてるのである。

『鬼三太残齡記』は牛若丸時代からの藤原秀衡との関係をはじめ、平家の追討や頼朝から遠ざけられたことなど、義経のひととおりの来し方も語るのではあるが、ここでの義経は、戦場で強かつたと述べるとはいえ、『義経記』で語られるような美化された人物というわけではない。むしろ人情の薄い人物とされている。武蔵坊弁慶も腕力は強いが驕暴で智力乏しく、秀衡の家来などからは嫌われつづける人物として語りられているのである。当時の奥州の一部には、このような語り
が喝采を博す精神風土があつたのであろう。(中略)

そしてこの書は、『雪国の春』の中の『義経記』に関する不朽の論考「東北文学の研究」誕生に一定の役割を果たし、その後の日本文学や民俗学などの日本文化研究に貢献していることも事実なのである。不完全なる発育をしたヲカシ文学なのかもしれないが、『義経記』をめぐる当時の奥州の語り物の世界を垣間見る糸口を与えてくれる資料として、貴重なのである。

田中は、柳田の論がその後の日本文化の研究に影響があつたことを認めた上で、なお「当時の奥州の一部には、このような語り喝采を博す精神風土があつたのであろう。」と述べ、『鬼

『三太残齡記』が、当時の地域社会の精神性を反映したものとす
る見解を示している。

ところで、『鬼三太残齡記』の本文の情報量は『清悦物語』の
三倍近くある。そのうえ物語の大意では義経は平泉の高館で自
害せず、また、雑色の鬼三太は自ら清悦と名乗るなど、清悦上
人と同一人物に設定されているが、その人物像は大きく異なっ
ている。そもそも『清悦物語』の別本ないし異本と位置づけて
よいか疑問が残るところである。ここでは両者の差異に注目
し比較の視点から見えていくことにしたい。

先行研究に加え、『鬼三太残齡記』の諸本および書承状況につ
いても触れておきたい。すでに須田学が、東北大学附属図書館
に所蔵する一冊（安永十年の写本を享和元年に書写）を翻刻し
ている。東北大学附属図書館本を底本にして、盛岡市中央公民
館所蔵本の一冊と対校している。両書の細かい異同はあるが、
転写の際による異同といえる。

須田はこの翻刻を大東文化大学院の『日本文学論集』二八
号に掲載するが、その後、森本浩雅が同論集三七号に「架蔵本」
として翻刻している。この写本の転写過程は不明だが、須田が
『鬼三太残齡記』を翻刻するために持ち込んだ資料かもしれない。
森本と須田の翻刻を対照すると、本文に多くの異同が見られるも
の、底本は東北大学附属図書館所蔵本に近いと思われる。田中
が掲載した成城大学の『諸国叢書』本も東北大学附属図書館所蔵
本である。ほかにも『鬼三太残齡記』の写本は東京都立中央図書

館と尊経閣文庫にあるとするが、筆者は未見である。

したがって現存する写本の多くは東北大学附属図書館本に基づ
いている。また、『清悦物語』と同様に版本は見当たらないので、
愛好者による書写の形で伝承されてきたものであろう。

二 『鬼三太残齡記』と『清悦物語』の内容比較

『鬼三太残齡記』（以下、『残齡記』という）と『清悦物語』（以下、『清悦』という）との比較にあたって、巻末の資料「鬼三太残齡記」と『清悦物語』の対照表¹について簡単な説明を加えておく。表は、『残齡記』の展開に沿って、一〇の項目をたて、その内容を簡略に記したものと、『清悦』の内容とを対照した。また、両書と関わりのある作品や伝説等の事項について備考に適宜示した。なお、内容の比較のために巻末の表を(一)～(四)に分け、それぞれを簡略にした表を用いて、検討を加えていくことにする。

(一) 主人公、聞き手、携行品、長寿の理由

作品名	内容	備考
『鬼三太残齡記』	『清悦物語』	
1 主人公	鬼三太（『清悦』 鷹眼虎質ノ老翁）	『白石翁傳』（東藩野乗） と風貌が類似
2 聞き手	無名翁	
3 携行品	小野太右衛門	小野太左衛門
4 長寿の理由	感人魚	赤漆の函 ニンカン 伝説 源義経の筆跡と自著 八百比丘尼伝説

まず、1の「主人公」について、『残齡記』では「雑色鬼三太清悦」と表記される。その鬼三太の「鬼」は、『義経記』等では「喜」の字をあてるが、『鬼三太』では鬼一法眼から兵法を伝授されたことにちなみ、「鬼」の字をあてると説明する。「鬼三太」を清悦と称することについては「はじめに」で記した通りで、自ら名乗ったとする。一方、『清悦』では、主人公は一貫して清悦のままである。なお、『残齡記』の鬼三太の性向については、『東藩野乗』（『仙台叢書』所収）の「白石翁」と類似する。

2の「聞き手」は、仙台藩の田村家の家臣の小野太右衛門であるが、『清悦』では名前が小野太左衛門とあって、右・左の違があるが、その理由は明らかではない。

3の「携行品」については、両者とも同じような函になっているが、その中身については、大きく異なっている。『残齡記』では函の中に「鬼一法眼の軍法」「伊豫守義経出芳野山記」「鞍馬別当東光坊の阿闍梨の状」「護身法の次第」「観音ノ像」と多様なものが入っており、また「観音ノ像」には「是ハ雑色鬼三太某二授クルト書タリ」とある。ところが、『清悦』では「義経御直筆」とのみある。『残齡記』が、兵法書や書状など種々とりあげる意図がどこにあるのか不明であるが、鬼三太の権威づけに留意したのかもしれない。

4の「長寿の理由」は、衣川で会った山伏の饗応を受けて食べたものによるが、『清悦』では「仁羹」（ニンカン）と表記するが、『残齡記』では読みを倒置させた形の「感人魚」と記す。

なお、この食物による長寿は八百比丘尼伝説のモチーフである。

(二) 屋島の戦いから北国落ちへの展開

5	屋島の戦い	梶原景時と源義経の逆櫓の争い	なし	『平家物語』巻十一 「逆櫓」～「嗣信最期」
6	奥州下り	金売吉次と鞍馬出 頼朝の拳兵と出陣	なし	
7	北国落	義経主従、二手に分かれて行動	なし	

5の「屋島の戦い」は、『平家物語』の「逆櫓」から「嗣信最期」までの踏襲と思われる。『残齡記』は『平家物語』の「逆櫓」の梶原を取り上げるが、その後の梶原についての言及はない。一方、『清悦』では最後の「仙北次郎」の物語で梶原が突然登場し、しかも梶原の義経への讒言を初めて知った頼朝は驚き、すぐさまに梶原を死刑に処す。この梶原についての両書の記述を見る限り、いずれも首尾一貫したものとは言えない中途半端な扱いで、殊に『清悦』では史実や通説とかけ離れた荒唐無稽な最期になっている。

6の「奥州下り」は『清悦』にはなく、『残齡記』は『義経記』や舞曲などに拠って組み立てたと思われる。藤原秀衡が金売吉次より義経の鞍馬出を聞いて保護しようとするし、義経も僧正が谷で異人より剣術を学んでいる。一方、鬼三太が鬼一法眼から兵法を伝授したという話は『義経記』にはなく、鬼二郎幸種と鬼三太清悦とが、堀河御所で義経に仕えた頃を受けたことになっている。

また、『義経記』で「喜三太」が活躍する「堀河夜討」の戦いは、『残齡記』にはみられない。『義経記』で単なる雑色にすぎなかった「喜三太」が、『残齡記』では、鬼一法眼の兵法書を携行するなど、格上げされた武将に人物造型されている点は、この物語の主人公としては当然かもしれない。

7の「北国落」のルートは、『義経記』や舞曲にそった道すじを辿るが、具体的な事件などのエピソードには触れない。ただし、『義経記』と大きく異なるのは、一行が二手に分かれて行動し平泉に到着することである。これについては、本稿のテーマとなる「会津街道」と関わることでなので、次の三章で詳しく述べていきたい。なお、「北国落」も『清悦』では触れられない。

(三) 義経の高館合戦

8 高館合戦		
①平泉周辺地域の人物の事	なし	幸若舞『和泉か城』
②鈴木三郎重家の事	鈴木三郎重家	幸若舞『よしつね高館』(高館)
③佐藤兄弟の実家の事	佐藤家への訪問	奥浄瑠璃『尼公物語』
④大蛇の出現と崇りの事	大蛇の出現	
⑤義経平泉脱出の事	義経の自害	幸若舞『高館』『含状』ほか文献多数

義経の「高館合戦」は、多くの文芸等でよく知られているところではあるが、『残齡記』でもその内容が詳しく、ここでは①「平泉周辺地域の人物の事」、②「鈴木三郎重家の事」、③「佐藤

兄弟の実家の事」、④「大蛇出現と崇りの事」、⑤「義経平泉脱出の事」に分けて整理し解説していく。

①「平泉周辺地域の人物の事」では、花真木幸丸以下数名の登場人物は、『義経記』には見られない人たちで、多くは秀衡の三男忠衡にかかわる地元的人物群である。敵味方に分かれているが、心情的には忠衡への「主君の情」に彩られている。『義経記』の高館合戦とは異なる新たな合戦物語の創出を意図しているのかもしれない。なお、『清悦』でもこの人物像は見られない。これらの人物の登場意図については、別稿に譲りたい。

②「鈴木三郎重家の事」の鈴木三郎は、戦場となる高館を直接訪れる『義経記』や舞曲などとは違い、まずは熊野修験と関わりの深い大藏坊乗俊を訪ねる。そして、これまでのいきさつを長々と語り終えた後で、弟の亀井六郎と大藏坊のもとで対面する。鈴木三郎と既知の間柄である大藏坊乗俊は、『残齡記』『清悦』のどちらにも登場するが、その人物の詳細は説明されない。在地独自の人物創造といえるかもしれない。

③「佐藤兄弟の実家の事」は、次の三章のところで詳しく触れることにするので、ここでは割愛する。

④「大蛇出現と崇りの事」は、高館合戦の最中に津波、洪水が押し寄せ、その波上に大蛇が出現することについては、『残齡記』『清悦』の独自の展開である。拙稿『清悦物語』における高館合戦の津波表現⁵⁾でも触れたが、『清悦』の大蛇出現場面では、いずれの諸本にも二度「つなみ」が時間差で押し寄せてく

る。しかも、第二波が大きいという特徴をもつ。その波に「背筋廿十丈計の大蛇」が乗ってくるというもので、『清悦』の「つなみ」表現は、津波災害の実際を踏まえている。これは、仙台藩に被害をもたらした慶長年間の津波の影響に基づいていると、拙稿では分析、考察した。

一方、『残齡記』では、『清悦』にみられるような「つなみ」ではなく、「魁浪」と表記される。二度押し寄せるといふ表現もなく、『清悦』が立脚した現実が薄れている。しかし、『清悦』同様に大蛇が波に乗って流れ込んでくる場面を用いて、津波の原因にも言及し、三つの行ないによる災いの祟りと述べる。一つ目は、秀衡が亡くなり、百日もたたぬうちに合戦を起こし、当月の始め利府にて神職の者を殺したからであるという。二つ目は、大蔵坊乗俊大峯入りのとき、照井と境目を争い奪ったからという。三つ目は、松嶋円福寺の悪僧追放の際、紫明神御神領まで没収したからという。この祟りの理由を持ち出すことの意味については不明であるが、いずれも和泉三郎忠衡と敵対する勢力が横暴を働いたことへの不満が背景にあるように見えるが、今後の課題としたい。

⑤ 「義経平泉脱出の事」は、④の大蛇出現の事件の後、『残齡記』は平泉の大蔵坊が義経に「蝦夷が千嶋」に落ち延びるよう進言する。この部分は『清悦』とは異なり、義経の蝦夷渡航を匂わせる『残齡記』独自のものである。これについては別稿を留意する予定である。

(四) 後日談 常陸坊(海尊)・鬼三太・清悦

9	後日談	鬼三太、常陸清悦、常陸坊の坊の事	
10	仙北次郎	なし	秋田城ノ助の事 『吾妻鏡』羽賀寺文書畧

9の「後日談」は、高館合戦以後のことである。『清悦』では清悦と常陸坊は生き残り、両者とも寛永七年に死去するが、常陸坊については仙北の地で亡くなったと記される。『残齡記』では常陸坊の死については触れず、鬼三太は「高館ノ古説トモ昨日今日ノ如ク語り終テ壁ニモタレテ眠ル」。その後茶を進めるが、「餘事ヲ問ヘ任其夜ハ不答」と物語は閉じる。

ところで、『残齡記』では常陸坊について独自の情報を記している。それによると、常陸坊は鬼三太と別れて後、建仁寺の榮西に学んで禅僧となり、その後奥州に下り、会津の実相寺の住寺となり、また、白河の妙雲寺に移り、那須にも数年滞在したなどという。これまでの仙人の常陸坊とは異なり、普通の寺僧としての行動といえる。ただ、その常陸坊と鬼三太との高館以後の交流は見られず、またかつての仲間をどのように理解していたのか、文意に不分明なところがあり、詳細はわからない。

最後の10の「仙北次郎」は、『残齡記』にはなく、『清悦』のみに伝わる物語である。これについては、既に拙論『清悦物語』にみる語り手の背景―「仙北次郎物語」における秋田城之助の問題⁶⁾で詳しく取り上げ、仙北地域で常陸坊が死んだことや秋

田城之助とは誰かということについて考察した。戦国末期に仙台藩・秋田藩・南部藩の争いといった時代背景や地域事情が、物語構成に反映していることを明らかにした。

『清悦』は奥州における事件や義経にかかわる既存の物語や舞曲等を下敷きに、潤色を加えて作品を構成し、読者の興味を引くような物語に仕立てている。『残齡記』はその『清悦』の要素を取り込んでいるものの、『清悦』の語り手の意図を超えて、義経にかかわる多くの話柄や創作を交えて作品化している。その点では、『鬼三太』は柳田國男のいう「オカシ文学」の不完全なカタチといえるかもしれない。しかし、『残齡記』は『清悦』のもつ事件への関心事とは異なる角度から創意工夫を加えているが、これも別稿に譲りたい。

本章では7の義経の「北国落」を話題にしながら、『残齡記』がこれまでの通説等に見られない北国落ちのルートを利用する背景について、当時の地域事情や物語の意図に触れながら考察を加えていきたい。

三 「鬼三太残齡記」の「北国落」の道行の検討

『残齡記』の「北国落」のルートは、『義経記』等とは大きく異なっている。義経一行は、義経の母常盤と縁の深い村長時春に挨拶した後、奥州の平泉に向かうが、その際、二手に分かれて行動する。『残齡記』は、「今世二傳ル物語トハイサ、カ相違有リ、義

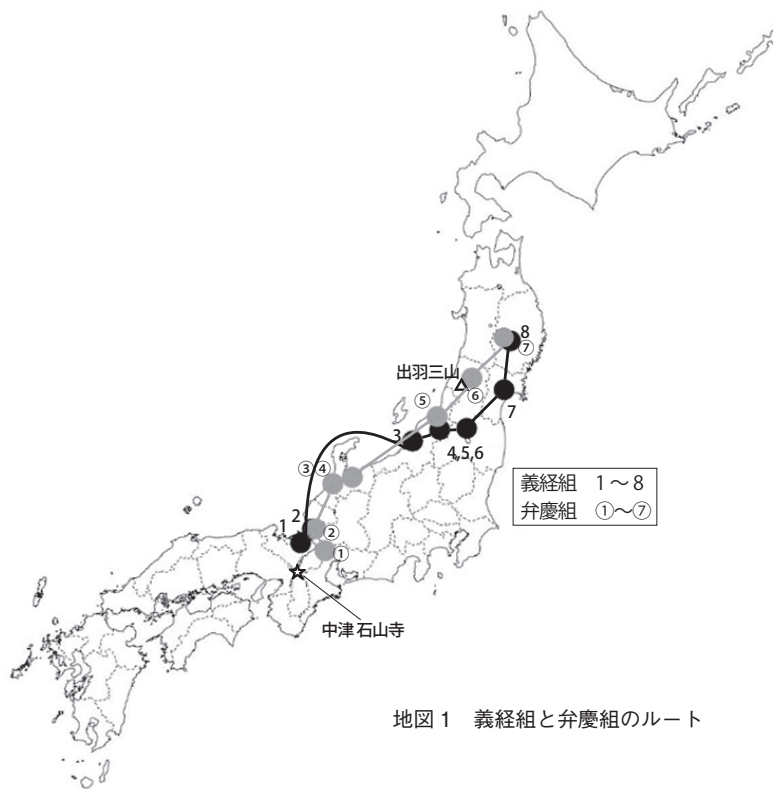
表1 「義経組と弁慶組の同行者と道行ルート」

	家臣団	道行（ルート）	備考
義経組	義経、熊井太郎、備前平四郎、伊勢三郎、兼房、鬼三太、雑色五人、満善阿闍梨（先達）	1 朽木越→2 越前氣比大明神（一祿宜金清のもとに五日逗留）→船→3 越後出雲崎→満善阿闍梨（先達にして）→4 津川→5 柳津→5 會津→6 信太郎郡目館→（7 松嶋大澤（常陸坊海尊の寺））→8 平泉へ	・金清は師僧東光坊の古里熊井太郎の従弟 ・乙寺満善阿闍梨（多田源氏の一族） ・佐藤元治の館には立ち寄らない
弁慶組	弁慶（先達）、御臺品子、片岡、鷲尾、杉目行信、亀井六郎	①海津→②荒乳山（愛発山）→③加州富樫の関→④如意渡→⑤村上→⑥最上→⑦平泉大先達大藏坊（大藏法印）のもとへ （=文芸作品にみられる道行）	謡曲『安宅』『拱待』幸若越前系正本『富樫』『笈探』／『義経記』卷七『判官北国落の事』『如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事』

経主従三十五人「二手二分ル」として、それぞれ別行動をとるが、これは稀有なことといえる。それぞれのメンバーと、道行を共にする人物を、表1「義経組と弁慶組の同行者と道行ルート」に示し説明していきたい。義経を頭とする義経組と、弁慶を先達にする弁慶組とに分かれる。弁慶組は、安宅の関や笈探など、これまでの文芸で見られる行程に沿っている。同行者は、義経の奥方のほか、片岡、鷲尾、義経の身替りとなる杉目行信と亀井六郎他である。

一方、義経組の同行者は、熊井太郎、備前平四郎、伊勢三郎、兼房、鬼三太他で、これまでに見えないコースを辿っていく。両者の行程を地図1「義経組と弁慶組のルート」に落としたので、適宜参照されたい。

弁慶組は舟を海津で降り、そこから愛発山を通り、富樫の関を経て、如意の渡に差し掛かる。ここで船頭に怪しまれ、弁慶が杉目行信と御臺品子を濱に投倒し、扇をもって背中を激しく叩く。この場面は『義経記』と同様であるが、義経に代わって



地図1 義経組と弁慶組のルート

義経とよく似た杉目と品子が標的にされる。その後、村上、最上を経由して、奥州平泉の大先達大藏坊のもとへと辿り着くといったコースである。

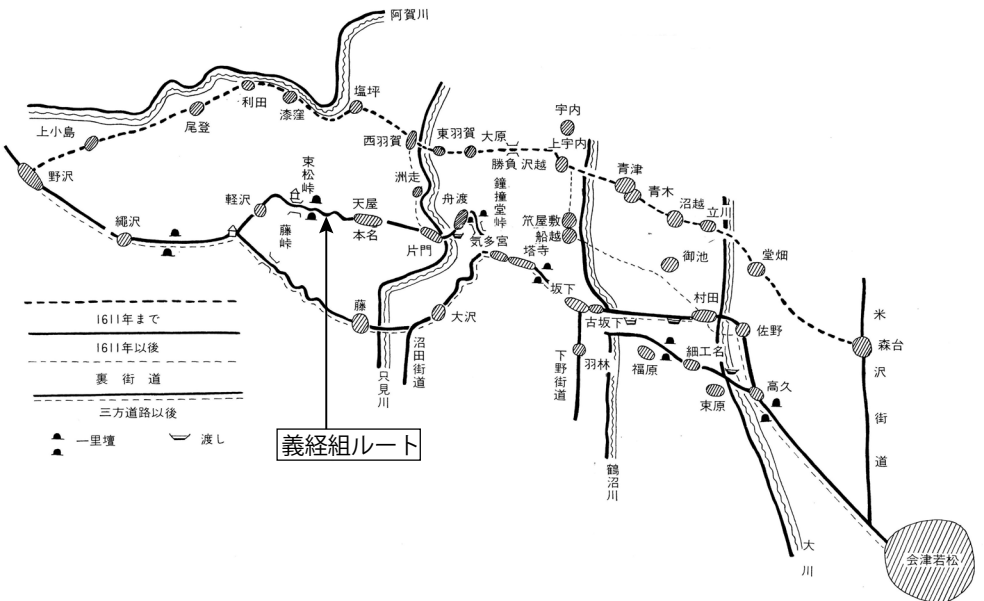
一方の義経組は、義経を頭に熊井太郎、備前平四郎、伊勢三郎、兼房、鬼三太と雑色五人のグループで、一行は、湖西の山中の朽木街道を北上して、越前の氣比大明神の一杯宜金清のもとを訪ね、ここに五日ほど逗留する。この金清は、義経の師僧東光坊の故郷の出身で「熊井太郎カ徒弟也」と述べる。東光坊は、『義経記』でもなじみの深い人物で、鞍馬山の東光坊阿闍梨のことである。鬼三太の持ち物に、「鞍馬別当東光坊の阿闍梨の状」があることは前に触れた。金清、東光坊、熊井太郎、鬼三太は、それぞれ関係深い人物という設定である。なお、熊井太郎と鬼三太は、古浄瑠璃『くまの太郎』では兄弟として登場するが、ここでは指摘にとどめる。また人物関係でいえば、備前平四郎と兼房が『源平盛衰記』では、親子であると記される。命を共にする一行が、心的繋がりに加え、血の繋がりを強調しようとする意図がどこにあるのか、物語享受の深まりがこうした人物関係を求めるのか、興味深い問題であるが今後の課題になる。

ところで、道行の話題に戻すと、金清のもとから、義経組は船で越後の出雲崎に移動する。ここで、乙寺の満

善阿闍梨が加わり、一行の先達となつて案内する。満善阿闍梨は、源満仲や頼光を祖とする「多田源氏の一属」と『残齡記』では強調するが、実在する人物なのかどうか不明である。なお、乙寺とは如意山乙寶寺の通称で、新潟県胎内市乙にある智山派の真言宗寺院である。『残齡記』がこの寺の僧を先達にして先へと進む背景には、当時の修験との関わりを予想させるが、詳しくはわからない。

満善阿闍梨を案内役にして辿るコースは、「津川柳津会津ヲ過テ信太郡杉目ノ館ニ入セ玉フ」とある。福島までの道行に津川、柳津、会津といった越後の奥深い山を越えて会津から福島の新潟の館に入る。この経路は、いわゆる新潟県の新発田市と福島県の会津若松市とを結ぶ会津街道（越後街道）である。この会津街道は、慶長十六年（一六一二）の大地震以前は、耶麻郡西会津町の野沢から勝負沢を越えていくのが地震前のルートであった。しかし、地震後には勝負沢が崩れて通れなくなり、野沢から南側の東松峠を越え、気多宮、塔寺、会津坂下のルートに変更になった。『残齡記』に描かれる経路は、慶長年間の大地震以後のルートが記されており、物語の成立年代は、慶長年間以後のものともみることが出来る。（地図2「越後街道変遷図」を参照）

義経組のルートを確認すると、新潟の出雲崎から新発田に出て、東の津川に向けて、会津に入り会津街道の柳津、会津坂下から、福島の新発田の館へと向かったことになる。現在の新潟県新津から、会津若松を通して郡山に至る磐越西線に沿っ



地図2「越後街道変遷図」(会津坂下町史編纂委員会『会津坂下町史』福島県河沼郡会津坂下町 1974)

たコースで、南東北地方を横断していったことになる。なぜこのコースを辿ったのか。津川宿を立ったあと、会津街道の柳津塔寺、会津坂下を通るのはどのような理由からであろうか。

津川宿から野川宿にかけては「鳥追観音」(如法寺)、柳津には「柳津観音」(圓蔵寺)、会津坂下の塔寺には「立木観音」(惠隆寺)があつて、この会津街道は観音信仰と縁が深い⁽¹⁴⁾。そのことと鬼三太の携行品の朱塗ノ函に「観音ノ像」の持仏があり、「是ハ雑色鬼三太某二授クルト書タリ」とある。鬼三太と観音信仰の接点を考えてみなければならぬ。あるいは当時の観音信仰の隆盛が、このような形で物語に取り込まれたものであろうか。しかしながら、これは単に憶測にすぎず、結論を急ぐことはしない。

それよりもここで考えたいのは、義経組が会津街道を通つて、福島に立ち寄つたということである。北国落ちの際、義経一行が二手に分かれ、一方が会津街道を渡るといふ話は『残齡記』特有のものと言つてよい。『残齡記』にこのルートを通らせる必然を、物語上から検討してみたい。

会津街道を無事に通り過ぎた義経組は、急ぎ「信太郎杉目ノ館」に向かうことになる。その部分を『残齡記』では次のように記す。

杉目ノ里ト云ハ今ノ福嶋ノ驛也、行信ハ佐藤継信カ一属也、平和泉ト杉目ノ間四日路ナレハ義経モ何トソ一日路ホトノ所ニモ近ヨラハヤト思案アル、殊ニ信夫庄司元治ハ秀衡ニ恨ミ有テ、義経ニモウトシ、是ハ先年義経都上リノ時、秀

衡カ子一人モ不参、唯元治カ子共計ヲ遣シケルヌヲ憤リ、其上兄弟共ニ再ヒ古郷ヘカヘラス、又義経ヲモ恨ミマヒラセシハ、金剛秀成杉目行信去年奥州ヘ下リ給フ時、御書ノ一通モ元治ヘ給ハラヌ御情ナサ、継信八嶋ニテ討死セハ、其形見ニ忠信一人ハ義経ノ身ニ替テモ連下リ、信夫ノ庄司カ方ヘ密ニ入セ給ヘハ、元治ハ疾ニ臥ノ由ヲ告テ御馳走セス、継信忠信カ子共忍ヒテ参リ通フ此躰ニテハ叶フヘカラスト議シテ、松嶋向ノ嶺大澤ト云所ニ常陸坊海尊カ寺有り、是ヘ尋問、大藏坊法印ヲ以テ御館ニ告シム：(『残齡記』)

平和泉(平泉のこと)に向かう前に、福島の杉目ノ里に立ち寄る理由は、佐藤継信・忠信兄弟の父の庄司元治に会うためであつた。元治は我が子二人とも戦死して故郷に帰らぬことで、戦に一人の子も遣わさない秀衡を恨み、また、義経をも疎んじていた。同郷の一族の「金剛秀成杉目行信」が奥州に来た際にも、手紙一通もくれなかつたという。義経は、その元治を慰撫する必要のため、会津ルートで福島に来た。しかし、元治は病を理由に饗応を拒否したようで、仕方なく「松嶋向ノ嶺大澤ト云所ニ常陸坊海尊カ寺」を訪れたとある。ただ、この部分の文意が曖昧で、この解釈には自信がない。前後の状況からすれば、元治と秀衡・義経との間には疎ましい空気が流れていたことは確かであろう。

このことを察していた元治の妻は、夫を諫めて義経の加勢へと動く。「同廿六日昏方、信夫ノ館佐藤三郎兵衛カ子霍若丸、吉信

第四郎兵衛カ子吉忠、杉目ノ小三太、兵三百七十三人ニテ御味方ニ参ル、是ハ彼等ガ祖母秀衡カ妹也、元治ヲ諫テ御加勢ニ奉ル」とある。元治の妻が秀衡の妹という人物設定になっている。戦いの大義のために、確執を乗り越えて元治は一族とともに高館に駆けつける。しかし、高館の合戦は義経側が不利で、次の夜に大蔵坊の進言を受けて義経は、津軽へと逃亡を開始することになる。

この佐藤兄弟の母をめぐる話は、舞曲「尼公物語」に義経が佐藤兄弟の母を訪う物語としてある。成田守によると「奥羽永慶軍記」という軍記によれば、天正年間（一五七三〜九二）に、奥州の白河付近で座頭たちが、『尼公物語』にあり、という語りものを語った¹⁵と述べるなど、東北地方では人気を得ていた語り物のようである。『義経記』の流布本系にも、「継信兄弟御弔の事」として『尼公物語』と同一の内容のものが伝わっている。奥浄瑠璃の『尼公物語』にも、佐藤兄弟の子らを送り出す尼公の描写はあるが、元治の登場はない。

『残齡記』が元治と秀衡、義経との確執を説き、平泉の前に福島の杉目ノ里に立ち寄るのは、元治を高館合戦へと導く伏線として、ドラマ性を高めるための展開と解釈することができる。

さらに加えて言えば、杉目行信の義経身代りの問題がある。『義経記』等には登場しない杉目行信は、『残齡記』では「佐藤継信ノ一族」「杉目カ義経の佛ニ似ル」とあって、佐藤兄弟とは縁があり、義経に風貌がよく似ている人物と描かれる。そして、『残齡記』の後半において行信は義経の身代りとなって自害する

ことになる。義経を蝦夷地へ逃がすために設定された人物である。義経の平泉脱出には、杉目行信を始めとした佐藤一属の人的支援が物語の底流に潜んでいる。

民間の伝説では、宮城県栗原市金成に杉目太郎行信の供養碑があるし、同じ栗原市栗駒沼倉に判官森¹⁸があつて、そこが義経の墓と残されるが、実は杉目行信の胴体を納めると言い伝えられている。行信の身代わり、義経の蝦夷渡航に基づくものである。『残齡記』における行信の行跡は、地域の伝説にも影響を与えている。

ところで、相前後するが『残齡記』では、元治と親交を深められなかった義経は、「松嶋向ノ嶺大澤ト云所ニ常陸坊海尊カ寺有り」として、松島の海尊を訪れたとある。福島の杉目の里から奥州街道を北に行けば、無理なく辿ることができる。『義経記』によると、海尊は園城寺の僧といわれる。角川源義によると、義経の北国落ちと園城寺の関係について次のように述べている。

『義経記』ではあからさまに、園城寺の義経荷担を物語っていないが、熊野山伏と深く結ばれていた園城寺は、北国落ち物語を熊野語り部とともに管理していた。∴園城寺は義経物語の成立期において、「判官びいき」を主張したかったが、鎌倉幕府と深く結ばれていた政治的な事情は、義経に味方するという態度をあからさまにはなしえなかったのである。（中略）「北国落ち」物語は熊野語り部の唱導にかか

るものであり、これが盲目の琵琶法師の弦にのせられていたからには、園城寺の修験者には、この物語は無縁ではなかった。北陸道の修験道場に支配的勢力をもつ園城寺は、熊野と結ばれた山伏文芸として義経物語を支持していたのである。(角川源義「京都脱出」『源義経』¹⁹)

義経の北国落ちの物語は、山伏をはじめ座頭集団などによつて語られたというのは通説である。松島の海尊を訪ねる件には、こうした事情があるのかもしれない。前述の挿入文をみると、どうしてもこれを入れざるを得ない事情があったのであろうと思われる。『残齡記』では、海尊は北国落ちに同行していないが、ここに海尊を参入させたのであろうか。北奥羽の地には常陸坊海尊の伝説が、あちこちに残されている。義経一行を物語や伝説として受け入れる土壌には、座頭や修験の活動があることは広く言われてきた。『残齡記』もそうした二環と理解する必要がある。

おわりに

本稿は『鬼三太残齡記』という旧仙台・盛岡藩で書承されてきた義経にまつわる物語を取り上げ、これと類似した内容の『清悦物語』と比較対照し、その差異を明らかにしながら、作品の特徴や独自性を追究した。続いて都を逃れて平泉に向かう義経一行の「北国落」のルートに注目した。

『義経記』や舞曲などに見られる北国落ちとは違い、二手に分かれ、それぞれ別コースを歩む。同行するメンバーおよび行程のうち、義経を頭とする血縁関係の近いメンバーは舟で琵琶湖を渡らず、湖西の朽木街道を通り、氣比大明神に立ち寄り、その後舟で越後の出雲崎へ、さらに北上し内陸部の津川を通り、柳津、会津坂下から福島市の杉目の里へと到着する。しかし、立ち寄る目的である佐藤継信・忠信兄弟の父の佐藤元治の饗応を受けることなく、ここから常陸坊海尊のいる松島へと向かう。

この会津街道を経由する福島杉目へのルートをなぜ選定したのか、これが物語上どのような意味があるのかについて考察した。会津街道の観音巡礼にも似たコースは、慶長十六年(二六一)の大地震により旧街道が通行不可となり、「虚空蔵尊の舞台」が崩壊した柳津や、「塔寺観音堂」(立木観音のこと)が倒れた坂下を通ることになる。このコースには「会津」を強く打ち出したという語り手の意図があったのかもしれない。また、海尊のいる松島の寺によるなど、熊野系集団との関係を想像させるところもあるが、詳しくは触れない。

それよりも杉目の里および佐藤元治に注目する。この同郷の二人、すなわち杉目行信と佐藤元治は、このあとの高館合戦で重要な役割を担うことになる。その伏線を含めてのルートの設定と考えたい。というのは、杉目は義経の身替りとなって自害し、また、息子兄弟の死により秀衡、義経と一時確執疎遠にあった佐藤元治は、私情を捨て大義に従い義経勢に加勢し、奮迅の戦いの末に討

ち死にする。この背景には元治の妻すなわち秀衡の妹の「尼公」がいる。血縁関係の濃い人物設定が『鬼三太残齡記』に通底しているようで、それは平泉という地域の精神性の問題へと繋がっていくように考えられる。しかし、本稿では平泉の地域性の問題について、深く追究できなかった。いずれ稿を改めて追究したい。

〔謝辞〕本稿は、第四三回日本口承文芸学大会での報告をもとに執筆している。福田晃先生、小池淳一先生、佐藤優先生をはじめとする会員の先生方、新潟県胎内市の乙宝寺の小川義隆様、また指導教授の花部英雄先生には適切なアドバイスやご助言を頂いたことを記しておく。

注

- (1) 柳田國男「東北文学の研究」『雪国の春』『柳田國男全集 三巻』一九九七 筑摩書房
- (2) 前掲柳田全集による。
- (3) 田中宣一「第五章『鬼三太残齡記』への関心」『柳田國男・伝承の「発見」』二〇一七 岩田書院は、成城大学民俗学研究所編『諸国叢書』(第一一輯、一九九四)の「解題」の全文を掲載している。『諸国叢書』と表現が一部異なるところがあるのが、最新の『柳田國男・伝承の「発見」』の本文を引用した。
- (4) 須田学「『鬼三太残齡記』解題・翻刻」『日本文学論集』第二八号 二〇〇四 大東文化大学大学院
- (5) 拙稿「研究ノート『清悦物語』における高館合戦の津波表現——(付)『清悦物語』翻刻」『共立レビュー』四一卷

二〇一三 共立女子大学 四三〜六八頁

- (6) 拙稿「『清悦物語』にみる語り手の背景——「仙北次郎物語」における秋田城之助の問題——」『國學院大學大学院紀要(文学研究科)』四九号 二〇一八 一六九〜一八六頁

- (7) 留守一族の写本といわれる『陸奥風土記』にも、「二手に分かれる」場面が記されるが、通例の展開ではない。また、二手には分かれませんが、弁慶を含んだ義経一行が会津を通ったという伝説には、「八二 樋渡に来た源義経」井関敬嗣『会津坂下町の伝説と史話』一九七三 浪花屋書店、皆鶴姫の伝説と関わらせて坂下町の「鏡が池」や「亀井六郎の死とその筈」会津民俗研究会「編」『会津の伝説』一九七三 浪花屋書店などがある。

- (8) 「熊井太郎」は、熊井太郎忠元といって、平家諸本、『義経記』『源平盛衰記』に名が見られる。土佐搦と呼ばれた古浄瑠璃の名手山本角太夫(一七〇〇年没)の代表作、古浄瑠璃『くまる太郎』(『熊井太郎孝行之巻』)に、「熊井太郎左衛門友治」と喜三太は、共に「ゆうけんの子」で兄弟として描かれる。

- (9) 『源平盛衰記』に備前平四郎を載せたり。備前平四郎房成は堀川大納言道具の家士備前守兼房の子也。義経幼時、長州の土原本武道人道に苦しめらる、際、之を救ひ、後義経に従ふと云ふ。」と、『源平盛衰記』には、兼房が備前平四郎の父となっている。

- (10) 天平八年(七三六)行基及び天竺国菩薩僧止の開基と伝えられる古刹で、『乙宝寺縁起絵巻』は、安元二年(一一七六)に仏舎利奇瑞を伝えている。この仏舎利は、一度伊達氏に奪われたが、奥山庄中条地頭中条房資らが応永三〇年(一四三三)に回収して寺に寄進したと享徳三年(一四五四)の記録にみ

えるという。また、『越後野志』に、一一九二年、源頼朝より、乙宝寺に寺領の寄進があったと記されている。

- (11) 現任職の小川義隆氏によると、「弁慶の書写といわれる写経」が什物の中にあるという。この由緒は不明だが、修験との関わりは否定できない事例である。(二〇一九年八月二十二日調査)

- (12) 前掲留守氏の『陸奥風土記』では、津川、柳津、亀割山というコースになっている。亀割山は『義経記』でなじみ深いのが、このルート上に亀割山をもつてくるのは、距離的な問題が残る。

- (13) 会津民俗研究会「編」『如法寺の鳥追観音』（西会津町）『会津の伝説』一九七三 浪花屋書店に、空海が阿賀野川のほとりの淵にさしかかった際に、観音と合ったという伝説がある。

- (14) 会津観音巡礼に入る。会津高田町にも「浮身観音堂」というのがあって天海の開山で著名である。南光坊天海は、江戸初期の朝廷・宗教政策に深く関与し、後に寛永寺の開山としてよく知られる。この会津街道は、そのような政治的背景をも伺わせる。

- (15) 「解説」梶原正昭「校注」『義経記 新編日本文学全集六二二 二〇〇〇 小学館

- (16) 前掲『義経記』「解説」による。
津久毛地域に、「身替杉目太郎行信碑」が現存する。杉目行信は「磐城杉妻城主」であったが、義経の身代りになったという。石碑には「源祖義経神靈身替杉目太郎行信」と書かれている。

- (18) 佐竹馨「源義経の墓」成田正毅「編」『郷土の傳承』第三輯 宮城縣教育會 出版年不明には、栗駒の小学校の後方二百メートルに、判官森があり、そこに「五輪の塔と古碑とあり、古碑には「大願成就 上拝源九郎官者義経公 文治五年

閏四月廿八日」とある。そのほか、判官森付近の田園に二本の「義経鞭櫻」があり、「古人の詠める 武士の手に取りなれし鞭櫻 さしたるまゝの若さなりけり」と伝わる。そのほか、「貴船社」「白旗社」、そして「御前水」が義経の縁の伝説である。『奥羽観蹟聞老志』によると、沼倉小次郎高次という者が義経の自害後、この地に葬ったと記される。それが転じて、杉目行信の伝説へとつながったのであろう。

- (19) 角川源義「京都脱出」『源義経』二〇〇五 講談社

参考文献

麻原美子・北原保雄「校注」『舞の本』（新日本古典文学大系五九）一九九四 岩波書店

市子貞次「校注」『平家物語②』（新編日本古典文学全集四六）一九九四 小学館

岩手県立図書館「陸奥風土記」（岩手史叢 第十卷）一九八三 岩手県文化財愛護協会

岩渕実「義経伝説物語」二〇〇六 新風舎
太田孝太郎「南部叢書」一九二八 南部図書刊行会

海音寺潮五郎「ほか」『義経（書物の王国）』二〇〇〇 図書刊行会
梶原正昭「校注」『義経記』（新編日本古典文学全集六二）二〇〇〇

小学館
福田晃・真鍋昌弘「編」『幸若舞曲研究 第八卷』一九九四 三弥井書店

（みた・かな）國學院大學大学院博士課程

資料『鬼三太残齡記』と『清悦物語』の対照表 *ただし、『清悦物語』は『南部叢書』に収録される本文に基づく

内容 作品名	『鬼三太残齡記』	『清悦物語』	備考
1 主人公	<ul style="list-style-type: none"> ・鷹眼虎質ノ老翁 ・無名翁 ・清悦と称し、氣散とも名乗る〓鬼三太 ・鬼一法眼の兵法の伝授「鬼」の由来 	<ul style="list-style-type: none"> ・清悦 	<ul style="list-style-type: none"> 『東藩野乘』「白石翁傳」 『義経記』巻一 『義経鬼一法眼が所へ御出の事
2 聞き手	<ul style="list-style-type: none"> 小野太右衛門 朱塗ノ函 	<ul style="list-style-type: none"> 小野太左衛門 	
3 携行品	<ul style="list-style-type: none"> ・鬼一法眼の軍法 ・伊豫守義経出芳野山記(吉野記) ・鞍馬別当東光坊の阿蘭梨の状(書幹) ・護身法の次第 ・観音像：(是ハ雑色鬼三太へ)と記されている) 	<ul style="list-style-type: none"> 赤漆の函 ・義経御直筆 	<ul style="list-style-type: none"> 伝説 源義経の筆跡と白書 (公津鑑)・感神院「金剛筆寺文書」等
4 長寿の理由	<ul style="list-style-type: none"> 文治四年夏、鬼三太、洛陽の伽衆二人 ：釣りをしに衣川へ 鬼三太と友達の娘のみ、感人魚を食す ：長寿 (十一人の妻をもった) 	<ul style="list-style-type: none"> 義経が高館の御所にいた時期の六月上旬 清悦と御供二人 ：釣りをしに衣川へ 清悦と御供の一人の、家中の娘のみ ニンカンを食す ：長寿 	<ul style="list-style-type: none"> 八百比丘尼伝説
5 屋島の戦い	<ul style="list-style-type: none"> ・梶原景時と源義経の逆鱗の争い 義経を「猪のしし武者」とたとえた梶原を批判している 「梶原ナントノ身トシテ判官ヲ猪狗ニ喩フ更ハ似合ヌ也」 	<ul style="list-style-type: none"> なし 	<ul style="list-style-type: none"> 『平家物語』巻十一 「逆鱗」(「嗣信最期」)
6 鞍馬出 奥州下り 頼朝拳兵	<ul style="list-style-type: none"> ・東奥六郡ノ主、陸羽両国將軍藤原氏秀郷の後裔である秀衡が義経を保護した理由 ・金赤吉次のこと、僧正力谷の異人と剣術のこと、堀河御所のこと ・頼朝の拳兵の際、秀衡は義経の御供に佐藤継信・忠信、金剛秀成、杉目行信を従わせたこと 	<ul style="list-style-type: none"> なし 	<ul style="list-style-type: none"> 『義経記』 巻一「牛若貴船詣の事」 「吉次が奥州物語の事」 「遮那王殿鞍馬出の事」 巻三「頼朝謀反により義経奥州より出で給ふ事」
7 北国落ち	<ul style="list-style-type: none"> ・文治三年二月十八日 ・南都大路宇治山々信樂へ関津く石山寺の奥く黒津の里並 ・母常盤と縁のある村長時春に世話になる ・奥州下り：義経主従三十五人、義経組と弁慶組に二手に分かれる ・佐藤兄弟の親元治は、秀衡・義経を恨む ・松嶋向ノ嶺大澤ト云所ニ常陸坊海尊カ寺有り 	<ul style="list-style-type: none"> なし 	<ul style="list-style-type: none"> 『義経記』巻七 「判官北国落の事」

仙北次郎 なし	後日談 常陸坊と 清悦 ・海尊は禪の立派な僧になった(『残夢』) ・清悦は、今の世は耻を恥と思わぬ人が多い。四百年の耻を忘れないのは誠に良い僧であると常陸坊を評した	⑤ ・鬼三太・常陸坊は生き残る ○常陸坊…建仁寺の米西に法を学び、会津の実相寺の住寺となる …白河の妙雲寺へ ○鬼三太…清悦と名乗り、平泉周辺に居て最上あたりまで往来 仙台の地に入ることはなく、無無神納を長年の友とした …松嶋の法身和尚の弟子、又福仙という者…会津の人は彼を鬼三太と言った	④ ①秀衡が亡くなって、百日もたたぬうちに、合戦が起きた。当月始め、利府にて神職の者を殺した。(塩釜明神) ②大蔵坊兼俊大峯入りするとき、照井と境目を奪い取った。(金剛童子) ③松嶋円福寺の悪僧追放のとき、紫明神御神領まで没収した。(神明)	高館合戦 ③ ・秀衡の妹、佐藤元治の妻 継信の子鶴若丸、吉信の子吉忠、杉目ノ小三太、その他を義経の味方にと元治を認得 大蛇の出現、洪水 ・三つ又の災いによる祟り	② 藤代庄吉鈴木三郎重家一族：平泉大蔵坊兼俊坊に宿泊。 ・義経の北国落し同行できなかつた鈴木事情 (切目王子の神官十里海鷹が幼少のため、田邊古一を後見にした。藤代は鈴木入道有齋に預け、如月は藤代を立てようとした。比叡山に残つて、天台座主尊快親王の坊官治部法橋が松嶋に下るので同行する) ・大蔵坊宅にて、弟亀井六郎と対面	① ・秀衡の遺言(起請文) ・弁慶の悪行 ・和泉ヶ城の戦い 花真木幸丸・龍津の登場 小野寺清三郎・北上忠八の登場 ・國衡の家采高城源太(忠衡の烏帽子子)の登場 ・石橋清成(運喜坊)の登場 ・和泉夫妻の最期 ・文治五年閏四月
・山重忠との問答 ・秋田城ノ助の行く末	・頼朝による梶原景時の処罰、畠山重忠との問答 ・常陸坊は仙北にて死去 ・清悦と常陸坊は寛永七年に死去	・清悦と常陸坊は生き残る	大蛇の出現、二度の津波	工が子、鶴若丸(佐藤義信)、弟四郎兵工が子、佐藤義忠が参戦	・文治四年閏四月 鈴木三郎重家、紀州より平泉へ ・大蔵坊宿所に着、弟亀井六郎と対面	・秀衡の遺言(起請文) ・弁慶の悪行 ・和泉ヶ城の戦い ・和泉夫妻の最期
『吾妻鏡』 羽賀寺文書等	『源平盛衰記』卷四六「義経始終有様」 『通俗義経殿美事談』奥羽観蹟聞老志 『金史別本』雜記小説の類(高館の一條)	幸若舞『高館』(含状) 謡曲「野口判官」 『義経記』卷八「衣川合戦の事」 『御自害の事』「兼房が最期の事」 『源平盛衰記』卷四六「義経始終有様」 『通俗義経殿美事談』奥羽観蹟聞老志 『金史別本』雜記小説の類(高館の一條)	幸若舞『高館』(含状) 謡曲「野口判官」 『義経記』卷八「衣川合戦の事」 『御自害の事』「兼房が最期の事」 『源平盛衰記』卷四六「義経始終有様」 『通俗義経殿美事談』奥羽観蹟聞老志 『金史別本』雜記小説の類(高館の一條)	奥浄瑠璃『尼公物語』	幸若舞『よしつね高館』(『高館』) 『義経記』卷八 『鈴木三郎重家高館へ参る事』	幸若舞『和泉ヶ城』 『義経記』卷八 『秀衡が子共判官殿に謀反の事』